(C)沖縄タイムス社

第59回沖縄タイムス教育賞

贈呈式22日タイムスホール

県内の教育分野で研究・実践に顕著な成果を上げた個人、団体を顕彰する第59回沖縄タイムス教育賞に、南風原町少年少女合唱団指導者の外間三枝子さん(77)が選ばれた。これまでの歩みや思いを紹介する。那覇市のタイムスホールで22日に開かれる贈呈式は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、参加人数を制限して招待者のみとし、祝賀会は取りやめる。

音楽で磨く子の感性

外間三枝子さん(77) 南風原町少年少女合唱団指導者

沖縄わらべ歌 普及に力



インタビューに答える外間三枝子さん＝３日午後、那覇市・沖縄タイムス社

南風原町少年少女合唱団の指導者・指揮者として36年間、音楽活動の底上げに情熱を注いできた。ソプラノ歌手として数々のステージに立つ一方で、沖縄のわらべ歌の普及活動にも尽力。「沖縄に生まれた人間として、足元を見つめることが大切」と説く。

母が小学校教師だった影響で、幼い頃から学校が遊び場だった。母の弾くオルガンを聞きながら歌うのが好きで、自然と音楽に興味を持ち始めた。

琉球大学教育学部音楽科を卒業後、東京学芸大や国立音楽大で研さんを積んだ。帰郷後は基地内の米国人学校で文化教師として沖縄の歌などを担当した。結婚して子宝にも恵まれ順風満帆な日々を送っていたが、「音楽家なら一度はウィーンに行きたい」と一念発起。約1年間、「音楽の都」で学んだ。

指導者としての転機となったのは、1986年に結成した南風原町少年少女合唱団。当時、県内に音楽団体は少なく、「子どもたちが音楽に打ち込める環境をつくらなければ」と使命感に突き動かされた。音楽教育に力を注ぐ傍ら、行政に助成金を掛け合うなど裏方の仕事にも奔走。「夢のあるステージをつくりたい」一心で地道に活動を続けてきた。

力を入れるのは沖縄の歌の普及活動だ。94年には「南風原のわらべ歌・昔歌」のCDを制作。昨年には沖縄を代表する作曲家、宮良長包の歌曲集も出版した。「子どもたちがわらべ歌を学ぶ機会が少なくなっている。自分たちの音楽を知らなければ、ほかの音楽は分からない」と話す。

歌は世界共通との思いから、音楽を通じて人の輪も広げている。「歌は友だち」コンサートシリーズを企画し、ハワイやカナダ、韓国など世界各地と国際交流を続ける。「音楽があれば誰とでも仲良く、身近に感じられるから」と笑顔を見せる。

今では声楽だけでなくピアノや三線など国内外で活躍する若手音楽家を輩出。「厳しく指導することもあったが、二人三脚で歩んできた父母の支えがあってこそ。コロナ禍でコンサートをする機会が減っているが、今後も子どもたちの感性を磨いていきたい」と力を込めた。

（社会部・下里潤）

ほかま・みえこ　1945年、那覇市出身。琉球大学教育学部音楽科卒業後、東京学芸大や国立音楽大で研さんを積む。86年に南風原町少年少女合唱団を設立。国内外の音楽家との交流や、沖縄のわらべ歌を通じて子どもたちの人材育成に力を入れている。2021年度県文化功労者。

国内外との交流を評価

講評　選考委員長・比嘉敏幸

本年度は社会教育部門で南風原町少年少女合唱団の指導者の外間三枝子氏が「沖縄タイムス教育賞」に選ばれた。長年にわたる取り組みが子どもたちの成長や地域・父母との連携に結びつき、その効果が明確に表現されていた。受賞者には心から敬意を表したい。

外間氏は36年にわたり南風原町という地域に根ざし、音楽活動を通して生徒や児童を指導し、青少年の健全育成に貢献してきた。その活動は公民館のひとつのサークル活動にとどまらず、他地域の合唱団や国内外の音楽家との交流を通して子どもたちにさまざまな機会を与えてきており、非常に高い評価となった。

一方で本年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で学校や社会教育活動にも支障があったためか、過去最少の応募となった。そのためか、提出された資料も十分に準備されていない個人・団体が目立った。

沖縄タイムス教育賞は選考資料で評価するというのが基本である。今回、受賞を逃した候補者には、教諭個人としての実績は評価されながらも、児童・生徒とのかかわりが選考資料から見えないというケースがあった。

推薦者が選考資料をどう作るかも評価の大きな分かれ目となる。指導によって子どもたちがどう変化し、成長していったか。そういった教育指導の「秘訣」のような部分が見えると評価は高い。推薦者の皆さまには、功績をただ列挙するのではなく、きちんと第三者が客観的に評価しえるような資料や独自性を強調する内容を簡潔にまとめてあらためて応募をしていただきたい。

（沖縄タイムス社取締役読者局長）